

令和 3 年 5 月 25 日現在

機関番号：35409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K01805

研究課題名(和文) アクティブラーニングを導入したデートDV予防・介入教育プログラムの開発と効果検証

研究課題名(英文) Development and evaluation of a prevention program on dating violence introducing the active learning

研究代表者

赤澤 淳子 (Akazawa, Junko)

福山大学・人間文化学部・教授

研究者番号：90291880

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：アクティブラーニングを導入したデートDV予防・防止教育プログラムを開発するために、高校生・大学生を対象とした調査を行い、共感性や葛藤解決方略がデートDV加害に影響を及ぼすことを明らかにした。この結果を反映させたプログラムを高校生や大学生を対象として実施し、事前・事後・フォローアップ調査結果を分析した。その結果、本プログラムは暴力に対する認識を高め、維持することが示唆されたが、行動面の変容については効果がみられず、今後の課題として残された。また、高校の養護教諭を対象とした調査から、デートDVに関する教材不足が明らかとなったことから、我々が作成したプログラムのテキストを作成し、高校に配布した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで高校で実施されてきた性教育は生物学的な要素が大きく、かつ、講義形式で行われていることが多かったが、本研究ではアクティブラーニングを導入し、関係性という視点からデートDV予防・防止プログラムを実施することが出来た。また、これまでの国内におけるデートDV予防プログラムは効果検証が行われていなかったが、本研究ではフォローアップ調査も含めて効果の検討を行い、その効果と限界について明らかにすることができた。さらに、高校の教諭がプログラムを実施出来るよう、プログラムの内容や効果検証を含めたテキストを作成・配布したことは、高校におけるデートDV予防・防止教育の一助となったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：We conducted a survey of high school and university students to develop dating violence prevention program by introducing active learning, and found that empathy and conflict resolution strategies effected on the perpetration of dating violence. A program reflecting these results was implemented for high school and university students, and its effectiveness was verified through pre-, post-, and follow-up surveys. The results suggested that the program increased and maintained awareness of violence, but it did not have significant effect on behavioral change, which remains as an issue for the future. In addition, a survey of high school nurse teachers revealed a lack of educational materials on dating violence, so we made a textbook of our program and distributed it to high schools.

研究分野：発達心理学

キーワード：デートDV予防・防止教育プログラム アクティブラーニング 青年期 チーム学校

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

国内におけるデートDV研究は欧米より20年の遅れがあり、現在国内で実施されているデートDVの調査研究を概観すると、対象者はほとんどが大学生である。しかし、近年、高校生のデート経験率は50%を超えており(片瀬, 2013)、10歳代から20歳代の頃に交際相手からの暴力(デートDV)被害に遭っている者は10人に1人と報告されている(内閣府, 2014)。このような現状を鑑みれば、デートDVは早期からの予防が必要であり、少なくとも高校生を対象とした予防・防止に効果をもたらすプログラムを開発することが急務である。

また、高校等の教員の9割弱がDV予防の授業を学校で行った方が良いと思っているが、実際に導入されている学校は少ない(須賀, 2015)。近年、NPO法人による体験学習の手法を用いて行われるデートDV予防防止教育プログラムを導入している高校もあるが、それらについても実施のみに止まり効果検証が実施されていないことが多い(野坂, 2011)。よって、今後は学校内の教員とも協働して、授業の一環としてデートDV予防・防止教育を取り入れ、どのような効果がみられるのかについても検討する必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究は、高校や大学における新たな性教育の在り方を検討する試みである。現在高校で行われている性教育は生物学的な要素が強く、デートDVに対応したものではない。デートDV予防教育が導入されている場合でも、単発的な講義形式である場合も多く、効果検証が行われていない。そこで、本研究では、近年、能動的かつ汎用性のある学びとして注目されているアクティブラーニングを導入したデートDV予防・防止教育プログラムを開発し、養護教諭など高校の教諭との協同の下実施し、事前・事後・フォローアップ調査により変容効果を検証することを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 高校の養護教諭を対象とした調査

高校生におけるデートDV被害の実態と高校で実施されているデートDV予防教育の現状を把握するために、高校の養護教諭を対象とした調査を実施した。調査対象は、1府3県に所在する公立高等学校499校に勤務する養護教諭であった。回答は150件(回収率30.1%)から得られ、有効回答は148件だった。回答者の性別は全員が女性で、平均年齢は41.0歳( $SD=11.3$ )、養護教諭としての勤務年数は18.7年( $SD=16.4$ )年であった。

調査内容は、デートDV被害相談の経験、相談内容、高校で行う保健教育のテーマと指導機会について、デートDV予防教育の必要性と指導上の課題であった。

#### (2) デートDVの生起と関連する要因の検討

デートDV予防プログラムの開発に向けて、デートDVの生起と関連する要因について検討するために、高校生および大学生を対象とした調査を実施した。高校生については、地方都市にある全日制の公立高等学校5校の普通科の生徒を対象に、質問紙調査を実施した。調査の手順は以下の通りである。調査の実施を依頼する文書を地域内の全ての公立高等学校92校の養護教諭宛に郵送し、そのうち、受諾の返信があり、学校長の同意書を提出した学校に対し、調査協力者の人数を確認し、質問紙を持参した。質問紙の配布数は1,250部であった。調査は養護教諭から学級担任に依頼し、学級担任の指導の下、授業内で実施された。回収された質問紙は986部(回収率78.9%)であった。そのうち、分析の対象になったのは社会的望ましさ得点が18点未満で、欠損値のない839名であった(配布数に対する有効回答率67.1%)。社会的望ましさ得点により、対象を除外した理由は、暴力のようなネガティブな事柄について質問する場合、社会的に望ましい方向に歪んだ回答を行う可能性があるためである。この尺度では18点がカットオフポイントであると定められているため、得点が18点以上の回答者を分析から除外した。

大学生については、中部・近畿・中国・四国地方の大学および短期大学で無記名の質問紙調査を実施した。大学の授業終了時に調査用紙を配布し、回答を依頼した。その結果、大学生979名(男性399名、女性564名、性別不明16名)の回答を得た。そのうち社会的望ましさ尺度(北村・鈴木, 1986)の合計得点が18点未満で、欠損値がない834名(男性327名、女性507名)を分析対象とした。平均年齢は19.34歳( $SD=1.17$ )であった。

調査内容は、社会的望ましさ(北村・鈴木, 1986)、本来感(伊藤・小玉, 2005)、デートDVに関する暴力観(赤澤他, 2017)、依存的恋愛観(松並他, 2017)、共感性(葉山他, 2008)、最も身近な人物、親密性(井ノ崎, 1999)、被支配感(上野他, 2018)、葛藤経験の有無、葛藤解決方略、怒りの制御(鈴木・春木, 1994)、恋人との交際経験、デートDV被害経験、デートDV加害経験、であった。

#### (3) デートDV予防・防止教育プログラムの開発

(2)の調査と先行研究を参考にして、デートDV未経験者も含む予防を目的としたプログラムを開発した。プログラムは、デートDVに関する知識面の教授と、デートDVを予防するスキル

の獲得の両面を含むものとした。具体的なプログラム内容は、暴力とは何かの理解、他者視点の取得、葛藤解決スキルの取得(アサーション・トレーニング、スモールグループディスカッション、怒りのコントロールなど)、デートDV(暴力)予防・防止プログラムの作成、デートDV相談窓口の理解、であった。各高校・大学の実施形式に合わせて、内容をいくつか組み合わせることで実施した。

#### (4)デートDV 予防・防止教育プログラムの効果検証

開発したデートDV 予防・防止教育プログラムを近畿・中国四国地方の高等学校・大学 14 校(同じ高校・大学であっても対象が異なる場合は 1 校としてカウントした)で実施した。事前・事後・フォローアップ調査の内容は、デートDV に関する暴力観(赤澤他, 2017)、視点取得(葉山他, 2008)、アサーション(玉瀬他, 2001)、ジェンダー観(伊藤, 1997) 葛藤場面对応、社会的望ましさ(北村・鈴木, 1986)、であった。プログラムの効果を詳細に検討するために、対照群を設定する場合もあった。

#### (5)倫理的配慮

質問紙調査、プログラムへの参加、プログラムの効果検証の実施前に、福山大学学術研究倫理委員会の倫理審査を受け、承認を得た。調査票や効果検証については、個人を特定する指標として記号を用いてもらい、匿名性を確保した。回答は任意であり、回答しなかったことへの不利益がないこと等を調査票に明記し、可能な限り口頭でも説明した。

プログラム参加を希望した高等学校には文書にてプログラムと効果検証アンケートの実施要領、目的、プライバシーの保護等について説明し、学校長名での同意書を提出してもらった。事前に高等学校教員との十分な打ち合わせを行い、上記配慮の必要性を説明した上で、生徒の特色、実施上の注意点、プログラム内容への要望などの把握に努めた。生徒には高等学校教員からプログラム参加について事前説明を行ってもらった。参加を希望しない生徒がいた場合にはプログラム中の別室指導などの個別対応を求めた。

対照群もプログラム群と同様に暴力に関して学べるよう配慮した。具体的には、事後アンケートに回答した後、対照群もプログラムを受講するといった方法、フォローアップアンケートまで全て終了した後、プログラム内容をリーフレットにしたものを配布し、それをもとに説明を行うという方法を用いた。

## 4. 研究成果

### (1) 高校の養護教諭を対象とした調査

#### デートDV の相談を受けた経験

高校生からデートDV の相談を受けた経験を持つ養護教諭は、148 名のうち 119 名(80.4%) だった。回答者の 8 割が高校生からデートDV の相談を受けていることが明らかとなり、相談内容も身体的暴力から、携帯電話やメールを「チェックする」、「制限する」などの精神的暴力まで多岐に亘ることが明らかとなり、デートDV 予防・防止教育の必要性が改めて確認できた。

#### 高校で行うデートDV 教育の現状と課題

高等学校の保健教育で最も多く行われているテーマへの 148 件の回答のうち、最も多く実施されているテーマは「性感染症のしくみと予防」で 113 件(76.0%) だった。次いで「エイズとその予防」が 110 件(74.0%)、「妊娠・出産」105 件(71.3%) だった。「異性との交際・デートDV」は最も少なく 80 件(54.0%) にとどまっていた。

148 名の回答者に対し、「男女交際・デートDV」(以下、「デートDV」)を高校生に教育する必要があるかどうか尋ねたところ、「絶対に必要」79 名(52.7%)、「ある程度必要」69 名(47.3%) で全員が「必要」と回答していた。しかし、実際に勤務校で実際に「デートDV 教育を行っている」と回答した人は 81 名(51.0%) に留まっていた。

調査対象の高校の半数では、デートDV 教育は「必要」だと思っけていても、実施できていない現状が明らかとなった。デートDV 教育を行う上で養護教諭が課題と感じている点を Figure 1 に示した。最も多く指摘された課題は「デートDV 指導に使える教材がない」55 名(37.3%) で、次いで「被害状況などのデートDV に関する情報がない」47 名(32.0%)、「自分自身にデートDV に関する知識がない」40 名(26.7%) であった。このことから「教材の不足」、「情報の不足」、「指導者の知識」の 3 つに課題があることが明らかとなり、デートDV に関する教材の必要性が示された。

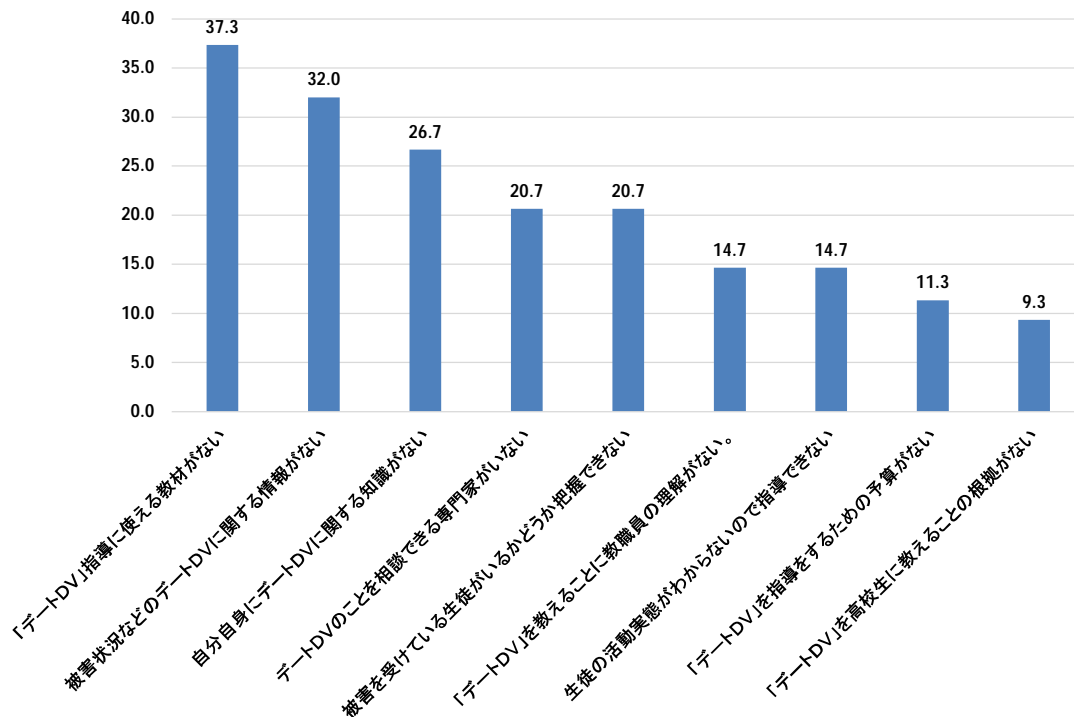


Figure1. デート DV 教育を行う上での課題 (N=148, 複数回答)

## (2) 高校生および大学生を対象とした調査 デート DV の生起と関連する要因の検討

### 依存的恋愛観とデート DV 暴力観との関連

デート DV と関連すると考えられる「恋人とは特別な関係であり二人は一体である。相手は自分のものだから自分の好きなように支配してもよいし、相手を束縛することは愛の証である」という考え方を「依存的恋愛観」とし、依存的恋愛観を測定する尺度を作成した(松並・青野・赤澤・井ノ崎・上野・青野, 2017)。この依存的恋愛観とデート DV における暴力観との関連を検討した結果、依存的恋愛観が強まると、恋人への暴力行為への認識が低まることが明らかとなった。恋人と自分は一体であるとする考えを持つ人は、恋人への暴力は許容されると考える可能性が高いことが示唆された。

### 恋人による被支配感とデート DV との関連

デート DV における被害者と加害者との関係性における支配—被支配関係に着目し、被支配感を測定する項目を作成した(上野・松並・青野, 2018)。これらの項目を用いて、デート DV 被害を、「暴力行為を受けること、恋人による被支配感が高まること、精神的健康が悪化することから成るもの」として捉え、デート DV 加害や自尊感情との関連について検討した。その結果、両性とも「恋人から無視される」などといった精神的暴力や、「性交を強要される」などの性的暴力を受けることで恋人による被支配感が高まり、恋人による被支配感は自尊感情を低下させていることが明らかとなった。

### デート DV 加害の規定要因

デート DV 加害の生起要因について、共感性の高さは怒りの制御、葛藤解決方略、およびデート DV 加害に、また、怒りの制御は葛藤解決方略とデート DV 加害、葛藤解決はデート DV 加害に各々影響を及ぼすと仮定し検討した。その結果、デート DV 加害を低減させるためには、共感性の認知的側面である視点取得と怒りのコントロールを高め、葛藤解決方略として支配方略や回避邦訳を選択しないようにすることが必要であることが示された (Figure 2)。

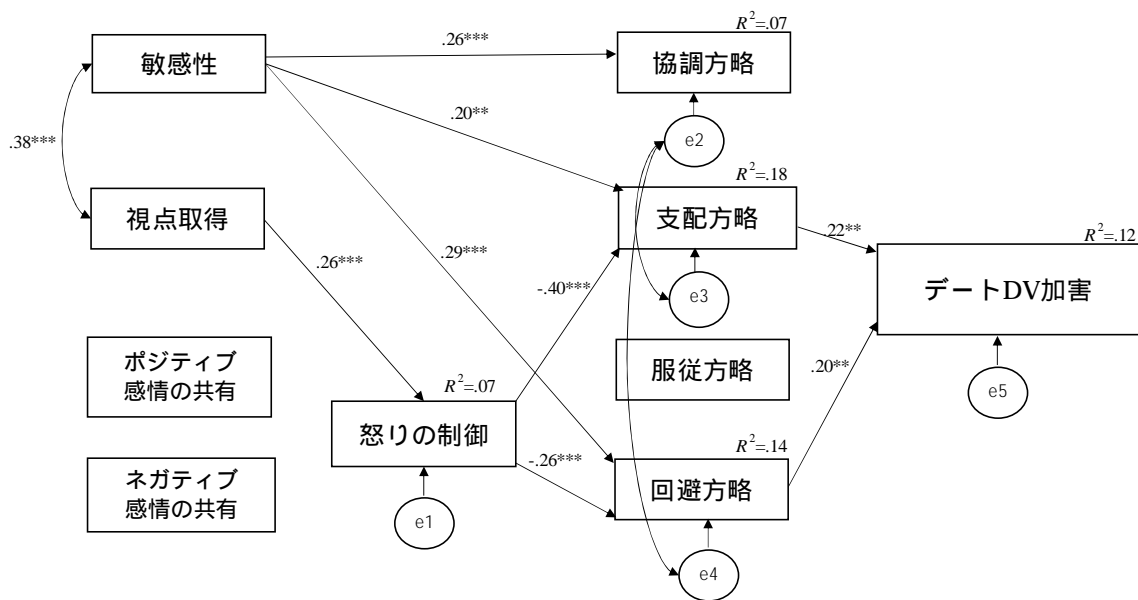


Figure 2. デート DV 加害に影響を与える要因の検討

### (3) デート DV 予防・防止教育プログラムの効果検証

葛藤解決スキルとしてのアサーション、視点取得、および暴力観の変容を目指したデート DV 予防・防止教育プログラム「青少年のための暴力防止プログラム (VPA: Violence Prevention Program for Adolescents)」を作成し、その効果と維持について検討した。その結果、本研究で作成したプログラム受講群は対照群より、事後において暴力への認識を高まっていることが示され、フォローアップ調査においてもその効果が維持されていることが明らかとなった。本プログラムでは、暴力の種類毎に具体的な例を挙げ、特に被害が目に見えにくい精神的暴力については、多様な内容を取り上げ説明した。また、「他者の視点に気づく」というプログラムにおいて、その行為が暴力であるかどうかを判断するのは自分ではなく相手であることについて学んだ。また、その行為が暴力であるという認識が自身と他者で異なることをワークで実際に把握できた。これらの内容が、参加者の暴力への認識を高めた可能性がある。本研究で作成したデート DV 第 1 次予防プログラムは、暴力観の向上と維持に効果が、また、葛藤解決スキルとしてのアサーションの関係形成については短期間の効果が認められた。しかし、今回のプログラムでは、介入群と統制群が無作為に分類されたものではなかったため、本研究の効果については慎重に解釈する必要があるだろう。

### (4) テキストの作成と配布

養護教諭を対象とした調査から、高等学校においてデート DV 指導使える適切な教材がないという意見が最も多かった。そこで、我々が開発した「青少年のための暴力防止プログラム (VPA: Violence Prevention Program for Adolescents)」の内容や実施方法に関するテキストを作成し、高等学校等に配布した。その際、すぐに授業で活用できるように、補助資料の CD も付録として付けた。



Figure 3 デート DV 予防・防止教育プログラムテキスト

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・下村淳子・松並知子	4. 巻 92
2. 論文標題 デートDV第1次予防プログラムの開発と効果検証1 高校生を対象として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井ノ崎敦子・葛西真記子	4. 巻 34
2. 論文標題 大学生の恋愛の発達と自己の発達との関連：自己心理学的観点による分析と恋愛相談との関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Junko Akazawa, & Atsuko Aono	4. 巻 15
2. 論文標題 Harassments and dating violence among university students in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Annual Review of Critical Psychology	6. 最初と最後の頁 50-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 赤澤淳子	4. 巻 17
2. 論文標題 デートDV予防プログラムの現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間学研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上野淳子・松並知子・青野篤子	4. 巻 66
2. 論文標題 大学生におけるデートDV被害の男女差 - 恋人による被支配感と自尊感情に与える影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 四天王寺大学紀要	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上野淳子・松並知子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・青野篤子	4. 巻 67
2. 論文標題 青年後期と成人前期におけるデートDV被害 - 恋人による被支配感に与える影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 四天王寺大学紀要	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Atsuko Inosaki, Makiko Kasai, & Atsuko Aono	4. 巻 15
2. 論文標題 Romantic relationship and sexuality problems of Japanese women students	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Annual Review of Critical Psychology	6. 最初と最後の頁 182-199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井ノ崎敦子・葛西真記子	4. 巻 33
2. 論文標題 国内外における大学生の恋愛に関する心理学的研究の動向 : 学生相談における恋愛問題解決支援のあり方の探求	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井ノ崎敦子・葛西真記子	4. 巻 20
2. 論文標題 「自己のための恋愛」を繰り返す女子学生との面接過程 自己対象欲求の成熟による凝集的自己の獲得	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育実践学論集	6. 最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松並知子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・青野篤子	4. 巻 64
2. 論文標題 成人におけるデートDVの実態とダメージの認知-依存的恋愛観と暴力容認傾向との関連	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 神戸女学院大学論集	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18878/00005451	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上野淳子	4. 巻 4
2. 論文標題 生徒指導が扱う性と暴力~中学校・高等学校における課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教職研究実践論集	6. 最初と最後の頁 285-293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・赤澤淳子・青野篤子・葛西真記子	4. 巻 32
2. 論文標題 デートDV被害及び加害経験と性交渉による肯定的な情動体験の関連	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子	4. 巻 17
2. 論文標題 デートDVにおける暴力の頻度と精神的ダメージ：ジェンダーと暴力の双方向性への着目	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 福山大学人間文化学部紀要	6. 最初と最後の頁 56-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子
2. 発表標題 高校生を対象としたデートDV第1次予防プログラムの効果検証-アクティブラーニングを用いて
3. 学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 赤澤淳子
2. 発表標題 大学生における過去の暴力経験がデートDVに及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第83会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井ノ崎敦子・赤澤淳子・上野淳子・松並知子・下村淳子
2. 発表標題 アクティブラーニングを用いた暴力防止プログラムの効果-2コマ構成の高校生対象プログラムの効果
3. 学会等名 日本心理学会第83会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上野淳子・赤澤淳子・松並知子・井ノ崎敦子・下村淳子・北山裕子・南畑好美
2. 発表標題 アクティブラーニングを用いた暴力防止プログラムの効果-高校生を対象として
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上野淳子
2. 発表標題 デートDV防止スキルを学ぶ
3. 学会等名 滋賀県立男女共同参画センター令和元年度デートDV防止啓発セミナー（兼 令和元年度教職員さんかく講座第1回）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松並知子・赤澤淳子
2. 発表標題 アクティブラーニングを導入したデートDV予防・介入教育プログラムの開発と効果検証
3. 学会等名 デートDV防止全国ネットワーク学習会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・下村淳子・青野篤子
2. 発表標題 高校生および大学生におけるデートDV予防・防止に向けて（1）
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上野淳子・赤澤淳子・松並知子・井ノ崎敦子・下村淳子・青野篤子
2. 発表標題 高校生および大学生におけるデートDV予防・防止に向けて(2)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井ノ崎敦子・赤澤淳子・上野淳子・松並知子・下村淳子・青野篤子
2. 発表標題 高校生および大学生におけるデートDV予防・防止に向けて(3)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下村淳子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子
2. 発表標題 高校生および大学生におけるデートDV予防・防止に向けて(4)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子
2. 発表標題 大学生を対象としたデートDV第一次予防プログラムの効果検証ーアクティブラーニングを用いて-
3. 学会等名 日本心理臨床学会第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井ノ崎敦子
2. 発表標題 樹木画によるDV被害者支援教育プログラムの効果検証 - アクティブラーニングを用いて -
3. 学会等名 日本描画テスト・描画療法学会第28回退会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子・下村淳子
2. 発表標題 デートDVを予防・防止する要因の検討(1)ー共感性・怒りの制御・葛藤解決方略とデートDV加害との関連
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上野淳子・赤澤淳子・松並知子・井ノ崎敦子・青野篤子・下村淳子
2. 発表標題 デートDVを予防・防止する要因の検討(2)ー恋人による被支配観を考慮したデートDV被害に葛藤解決方略が与える影響
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松並知子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・青野篤子・下村淳子
2. 発表標題 デートDVを予防・防止する要因の検討(3)ー依存的恋愛観と暴力観の関連
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井ノ崎敦子・赤澤淳子・上野淳子・松並知子・青野篤子・下村淳子
2. 発表標題 デートDVを予防・防止する要因の検討(4)ーデートDV加害及び被害経験と親密性との関連
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子
2. 発表標題 高等学校の養護教諭におけるデートDVに関する意識ー高等学校での取り組みと相談経験の差異から
3. 学会等名 日本心理臨床学会第36回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・下村淳子・松並知子
2. 発表標題 デートDV予防・防止プログラムの実施
3. 学会等名 日本健康相談活動学会第14回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下村淳子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子
2. 発表標題 高校生から相談されるデートDV被害の特徴ー相談内容のテキスト分析をもとに
3. 学会等名 日本健康相談活動学会第14回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下村淳子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子
2. 発表標題 養護教諭によるデートDV予防教育に関する研究(1)
3. 学会等名 日本健康相談活動学会第13回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 井ノ崎敦子・赤澤淳子・下村淳子・上野淳子・松並知子
2. 発表標題 養護教諭によるデートDV予防教育に関する研究(2)
3. 学会等名 日本健康相談活動学会第13回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 赤澤淳子
2. 発表標題 愛着スタイルと攻撃性、嫉妬、および葛藤解決方略との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	井ノ崎 敦子  (Inosaki Atsuko)  (40570099)	徳島大学・キャンパスライフ健康支援センター・講師   (16101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下村 淳子  (Shimomura Junko)  (60512647)	愛知学院大学・心身科学部・准教授    (33902)	
研究分担者	上野 淳子  (Ueno Junko)  (90460930)	四天王寺大学・人文社会学部・准教授    (34420)	
研究分担者	松並 知子  (Matsunami Tomoko)  (90534818)	同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員    (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関